

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成28年 7月19日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文化財総合研究センター

職名・学年 助教

氏名 内記理

助成の種類	平成28年度 ・ 若手研究者在外研究支援 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第23回欧州南アジア考古学・美術史学会 European Association for South Asian Archaeology and Art, 23rd biennial Conference		
発表題目	The Chronological Order of the Gandhāran Sculptures with Inscriptions including Dates		
開催場所	イギリス、カーディフ大学.		
渡航期間	平成28年 7月 2日 ～ 平成28年 7月18日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	学会参加費	27,000円
		交通費(航空運賃、国内・現地铁道運賃)	181,000円
		宿泊費の一部	101,000円
日当の一部		41,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 海外をフィールドとする申請者にとって、海外での学会で発表する機会を得てこそ、自身の研究の意義を確認することができます。また、ヨーロッパ渡航を機会に、現地に住むかつての指導教官に会って研究の相談をすることもできました。そのような場を申請者に与えてくださった京都大学教育研究振興財団に感謝いたしますとともに、今後もこのような助成を続け、若手研究者に機会を与えていただけることを望みます。		

成果の概要／内記理

学会の概要

この度、京都大学教育研究振興財団助成事業による「平成 28 年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成」を受け、2016 年 7 月 4 日月曜日から 8 日金曜日にかけての 5 日間、イギリスのウェールズ国の首都カーディフで開催された第 23 回南アジア考古学・美術史学会（European Association for South Asian Archaeology and Art）に参加した。学会にはイギリス、フランス、イタリア、ドイツ、オーストリア、スペイン、オランダ、ベルギー、フィンランド、スウェーデンなどのヨーロッパ各国の他、アメリカ合衆国、パキスタン、インド、タイ、韓国、日本などの世界各国から 150 人以上の研究者が参加した。学会においては会期中、15 個のセッションが設けられ、2 つの会場に別れて議論がおこなわれた。議論された時代は先史時代から中世までで、地理的な範囲は、インド・パキスタン・バングラディシュ・スリランカ・ネパールなどの南アジアを中心に東南アジアや中央アジアまでを含む。さらに、学会名に含まれる考古学と美術史学の専門家だけでなく、文献史学・碑銘学・宗教学・仏教学などの専門家も参加する。それぞれのセッションにおいては、それぞれの分野における現段階での到達点が示された。

発表の概要

会期の 3 日目の 6 日水曜日には、セッション「中央アジアとガンダーラ」がおこなわれた。そのセッションにおいて、申請者も英語による口頭発表をおこなった。申請者がおこなった発表では、これまでのガンダーラ彫刻の年代研究の中で大きな課題の 1 つであった紀年銘彫刻について扱った。

ガンダーラ地方（現在のパキスタン西北部にあるペシャーワル盆地）では、紀元後 1 世紀前半頃から仏教にかかわる題材をもった片岩彫刻が盛んに制作されるようになった。その中のいくつかは銘文をもつ。また、その銘文の中には年数が刻まれるものが存在する。ただし、その年数がどのような暦法を用いて数えられるかは刻まれていない。そのため、紀年銘をもつ彫刻の制作年代はわかっていない。

発表の冒頭では、これまでの紀年銘彫刻に関わる研究を振り返り、従来の研究が抱えてきた問題点を整理した。その上で、従来の方法では問題を解決できないことを指摘した。そして、代替の方法として、発掘による考古学成果を利用した年代検討を提案した。

考古学成果を利用した場合に、ガンダーラ彫刻の時間的な推移を説明することが可能である。その場合、ガンダーラ彫刻は、ぎこちない手法で作られたもの、写實的に表現されたもの、形式的に表現されるようになったものの順に現れたことがわかる。紀年銘彫刻のうち 1 点はぎこちない手法で作られたものであり、3 点は形式的な表現のものである。ぎこちないものは 1 世紀以後に作られたものであり、形式的な表現のものは 3 世紀以後に制作されたものである。

次に検討をおこなったのは、どの暦法を用いて紀年を計算するかである。彫刻以外の紀年銘資料をとりあげ、関連する時代のガンダーラ地方の紀年においてどの暦法が主に使われていたかを検討した。その結果、同地で使用されていた暦法がアゼス紀元であったことが判明し、それを用いて彫刻の紀年を計算した。算出された彫刻の制作年代は、考古学成果を利用した方法によって得られた年代的な知見と矛盾しない。

発表の成果

発表に対しては、質疑応答の時間にナポリ大学のアンナ・フィリジェンチ博士およびワシントン大学のマイケル・スキナー氏よりコメントをもらった。フィリジェンチ博士からは、イタリアの調査隊が発掘を続けるパキスタン西北部スワート地方のビール・コート・グワンダイ遺跡の最近の調査成果を活用することにより、申請者によるガンダーラ彫刻の年代研究がより形の整ったものになるであろうことを提案された。また、碑銘学者であるスキナー氏からは、彫刻の銘文が、碑銘学の現状に照らし合わせた場合にどのように解釈されるかについて検討をする必要があるのではないかと指摘された。

セッション終了後には、ウィーン大学のデボラー・クリンブルク・ソルター教授およびカロリン・ウッドフォード・シュミット博士よりコメントをもらった。クリンブルク・ソルター教授からは、用語の問題点が指摘され、またシュミット博士からは、本発表で扱わなかった彫刻資料を用いることで研究を前進させることができることを指摘された。

いずれの研究者からも、研究を前進させるためのコメントをもらっており、申請者のおこなう研究の有効性が国際的に認められていると判断できる。また、スキナー氏からは共同研究の実施についても提案されており、本発表をおこなったことが、今後申請者が研究を進める上で重要な機会となったことは疑いない。